

宇都宮の寺社を探ると室町・鎌倉時代が見えてくる

宇都宮市文化財保護審議委員会委員

大嶽浩良

1 神仏分離以前の宇都宮大明神—神仏習合の社会

- ・日本固有の神道信仰と仏教信仰が融合調和したこと。神仏混淆ともいう。神宮寺の建立や神前読経などはその所産。奈良時代頃に起こり、明治初年の廃仏毀釈・神仏分離令まで続いた。
- ・神宮寺とは神社に付属して建てられた寺院のことで、宮寺・別当寺とも呼ぶ。神前で仏教経典読経や加持祈禱をするなど、僧侶が神社の祭祀を仏式で挙行した。奈良時代から宇佐八幡大神宮寺・伊勢大神宮寺・鹿島神宮寺があり、本地垂迹説が流布した。
- ・本地垂迹説とは仏が権りに神の姿で現れ（権現）民衆を教化すると考える仏主神従の思想。仏を本地仏、神を垂迹神といい、大日如来と天照大神、阿弥陀如来と八幡神などはその例である。
- ・二荒山神社に例を取ると近世では宇都宮大明神と呼ばれ、民衆には明神様と呼ばれ崇敬されていた。近世中期には神主1人をはじめ社家6人、供僧6人の他宮仕13人・樵夫5人・楽人6人・神楽師4人・巫女6人・雑司5人・掃除夫4人・鐘撞2人、檜物師・土師師・宮大工各1人、御明役4人・供僧仕者3人など計74人、本宮寺・神宮寺・神楽寺・大日院・不動院など供僧6人のうち4人は真言宗、3人は天台宗であった（平凡社『栃木県の地名』）。（資料1）

2 宇都宮城下の神社—本郷町三峯神社を例に

- ・『宇都宮六十周年誌』（1965年）には市内の神社162社を書き上げているから、旧河内・上河内町を合併した今日ではもっと多いが、その由来は種々あるが面白いものとして本郷町の三峯神社（資料2）に例を取ろう。

本郷町火防の神三峯神社は福田小兵衛の建造にて、天保三（一八三二）年二月廿三日に泉屋と久喜屋との間より（今の神社）発火し全宇都宮を焼土と化した大火ありて、之れが火元争ひから大悶着して奉行所の裁断する處となり形勢容易でなかった時に、俠客を以つて知らる小兵衛が領主戸田侯に願ひ出て、久喜屋と泉屋の両失火と云ふことに成敗して此處に今後の不吉を除く為、神社を建てよはとの提議に大いに喜び其の議を許可して呉れたので、自ら武州秩父の三峯山に赴き分身を乞ひ創せしものにて、今に丸屋講とて存在し、二百年近くの今日曾て一度も火災に逢はぬと云ふはまことに奇と云はねばなるまい。当時丸屋でもその災に罷り見舞をうけた。残余のムスビに尺余の黒いうどんげが生い民衆を愕かせた。小兵衛之を「ムスビ」たり穂の神と称し社構に納めたりと。今市内にある三峯山神社は皆丸屋講中に合併し、年一度は講中の人秩父に参詣してその災厄を祈願している。

（福田重徳『宇都宮城下史』昭和8（1933）年）

（注1）丸屋—福田小平が経営していた市内随一の旅館兼遊郭。

（注2）うどんげ—イチジクに似た落葉小高木でインド周辺に分布。仏教では三千

年に一度咲くものとし、理想的な王者^{てんりんじしうおう}転輪聖王出現の瑞兆とされた。

3 宇都宮城下の寺院

総寺院数— 57 寺院（資料 3）、寺院の位置…天保 14(1843)年宇都宮古図（資料 4）

4 『下野国誌』（資料 5 - 1）に描かれた宇都宮下の寺院

- ・『下野国誌』は芳賀郡大道泉村（現真岡市）に生まれた河野守弘（1793～1863）が、嘉永 3(1850)年に刊行した地誌である。地誌とは歴史地理書で、今日でも栃木県内の歴史を考える上での基礎史料となっている。その中で宇都宮城下の寺院は 21 紹介されているがここでは 1 寺のみ紹介する。

粉河寺

- ・河内郡宇都宮池上町（現宇都宮市本町一筆者）にあり、常州黒子千妙寺末にて天台宗の大寺なり。寺領 100 石、領主の寄附なり。安楽山と号す。
- ・永徳 2(1382)年紀伊国粉河寺を移すと云う。本尊千手観音、則、紀州より将来する（持ってくる）所といへり
- ・紀州の粉河寺は光仁天皇の宝亀元(770)年草創と史に見えたり。当所に移したるゆへは、「南朝紀伝」に「北朝の応安三(1370)年五月、宇都宮下野守氏綱、紀州に発向す、紀州の宮方強くして、宇都宮敗北す、氏綱粉河寺に入、七月五日卒す、法名南齡庵禪綱と号す」と記したり。さればその因縁に依て、移したるものなるべし（以下略）。

（廃寺になる経過）

- ・はじめ池上坊と称する草庵であったが、宇都宮 10 代城主氏綱が、応安 3(1370)年北朝の軍に従って南朝と合戦した時、利なく紀州粉河寺に入り病死したことから、その菩提を弔うために、紀州粉河寺の本尊である千手観音を勧請し、永徳 2(1382)年 12 代城主満綱が建立し粉河寺と称した。
- ・これにより同寺は、宇都宮城下における二大寺院として東勝寺とともに栄えたが、慶長 2(1597)年、宇都宮氏没落によって寺領を失い、しばらくは廃寺同然の年月が続いた。
- ・元和 4(1618)年、奥平美作守忠昌が亡父の菩提のため再建、中興開山は日光山学頭伝海僧正。境内敷地縦 97 間(174.6 間)、横 91 間(163.8 間)の 8827 坪。本堂、元三大師堂、庫裡などのほか中庭に池が設けられ、池の中央に弁天島があったという。この池には釜川から水が曳かれていて常に流れがあり清水として名高かった。
- ・慶安 4(1651)年、境内に東照宮が祀られてからは、代々の宇都宮城主が参詣し、大般若経転読会には城内から城主代参の使者が立ち、祈禱札は城中へ納められた。
- ・寺領 50 石は寛永 10(1633)年以降、塙田村から蔵米を以て納入され、住僧の他修行僧が数名住んでいた。
- ・寛永 18(1641)年、伝海僧正によって八幡山が開山され、これより山は粉河寺支配となった。荒針村の大谷寺も本末関係にあり、二里山には寺付の隠居所もあった。これは松平下総守時代に拝領した。
- ・慶応 4(1868)年の戊辰戦争では一部の建造物が焼失したが、広い境内と池の水によって大部分が火災を免れた。明治 17(1884)年、県庁が栃木から移されるまでは、寺内に寛永～慶安期の石仏多数が林立し堂塔も健在であったが、この時境内が縮小され、東西 9 間 3 尺、南北 9 間の 83 坪となり、明治 30(1897)年には小袋町宝蔵寺に

合併され、石仏なども移転した。

- ・敷地は総合文化センター、本町合同ビル、栃木会館、旧 NTT などになっている。

5 『大日本名蹟図誌 第拾編 下野国之物』明治36年（合資会社光彰館蔵版、資料5-2）に描かれた宇都宮町の寺院

一向寺（清照山、時宗、西原町）（資料6）

- ・本尊一阿弥陀如来、運慶作。宝物一阿弥陀如来、春日の作（俗に汗かき如来と称す）。
- ・建治2(1276)年、7代宇都宮景綱の開基で、3代宇都宮朝綱の菩提寺として宇都宮城南の地藏堂廻輪寺地内に建立。
- ・応永12(1405)年、13代宇都宮持綱は先祖の菩提のため堂宇を改築。22代宇都宮国綱が没落した際、茂破町に移り、慶長年中(1596～1615)現在地に移転。
- ・寺領は朱印地5石。
- ・「明治四年(1871 一筆者)二月一旦廢寺ノ逆境ニ陥リシガ、其後先ノ住職守田雄道大ニ之ヲ憂ヒテ再興ニカヲ尽シ、遂ニ同十二月ニ至リ回復スルヲ得、稍ヤ旧觀ヲ保チ末寺一箇寺ヲ有セリ」

(参考)

長楽寺

- ・大黒町一向寺中にあり。境内縦36間、横32間5尺。西光山阿弥陀院と号し、時宗一向寺末なり。当寺は一向寺第4世忍阿上人の開基にて、応永11(1404)年大檀那宇都宮少将満綱朝臣なり。本尊阿弥陀如来は、銅仏にて長3尺4寸、上品上世の尊容なり。
- ・左の襟に説い我仏を得んに、国中の人天、^{じゅじゅ}壽終の後（原漢文）、右の襟に「復三惡道に更らば、正覺を取らじと、彼四十八願第2の文を調付たり。すべて発願帰敬の偈、^{けつ}道俗時衆等の文を衣に彫付、左の肩の終に、一向寺發起忍阿上人、大檀那藤原満綱」付たり。俗に汗かき阿弥陀といふ由。廢撤年月不詳

(「宇都宮郷土誌料 沿革之部ノ内」)

○汗かき阿弥陀と慰霊碑

一向寺の阿弥陀如来は凶事の前には、予兆として如来像の全身から汗が流れるという。宇都宮城焼失の前日（慶応4(1868)年4月18日朝）と22日夜にも汗をかき、19日には「城中および武家屋敷、町在家など多数が炎々と焼失したが、この折、阿弥陀如来は入道雲のようになって一向寺の本堂に打ちまがり、全身から汗を滝のように流して火炎の勢を食い止めた」（『一向寺の歴史と文化財』）との言い伝えを残す。境内には8月末に、会津田島で戦死した宇都宮藩士倉田弥重の修墓の他、近年になって戊辰戦争の慰霊碑も建てられた。

(大嶽浩良『下野の戊辰戦争』)

6 『大日本名蹟図誌』に紹介されなかった寺院—「宇都宮郷土誌料 沿革之部ノ内」(宇都宮市、明治末期 資料5-3)より

慈光寺(大悲山無縁院、浄土宗、塙田1丁目)

- ・塙田町百目鬼なる岡阜の中腹にあり、境内南北300間・東西170間、15,025歩、旧ト圭田7石あり。大悲山無縁院と号し、浄土宗にて、下総国飯沼弘理寺の末寺なり。
- ・開山は鎮譽魯耕祖洞和尚、本願宇都宮左少将成綱朝臣、慈光寺は即ち此人の法号。

- ・寺中に枝源五郎の墓あり。
- ・又千手堂・十三堂・鎮守八幡の社・大養院・栖柳院・松青院・幽玄院の塔頭、及道心寮4軒ありしが、いつの頃廢撤せしにや、今はなし。当寺の仁王門は、名匠の作なりとて世に聞こえたり。

※本寺参道の石段を覆うように、特徴的な桜の木が目飛び込む。これが有名な慈光寺の桜（別称赤門の桜、市指定）だ。樹高約 17.5 ㍎・枝張り東西約 17 ㍎、樹齢約 180 年の大樹で、市内で最も早く開花するところから、春を告げる彼岸桜として親しまれ、濃いピンクの花は見事だ。

寺城内の多くの塔頭は戊辰戦争の兵火によって焼失し、僅かに山門のみが残った。その山門も昭和 20(1945)年 7 月、宇都宮空襲によって焼失してしまった。現在の本堂は、昭和 27(1952)年に再建されたものだ。

焼失した山門（仁王門）は、安永 4(1775)年、枝源五郎（1736～1806）が万人講を作って、宇都宮城下の人々から永代祈禱料として寄付を集め、これによって 3 年後の同 7(1778)年に建立したもののだが、周囲を赤く塗ってあるところから通称赤門と呼ばれた。現在「赤門通り」の名が残っているのは、勝手の大通りから真っ直ぐ北上すると、慈光寺の赤門に至ったからである。近年、赤門再建の工事が進められ、平成 20(2008)年竣工した。

境内の鐘楼には、宝永元(1704)年銘の銅鐘（市指定）が吊ってある。宇都宮藩御用鋳物師戸室貞国の鋳造である。

本堂前から西方の墓地へ向かう石段の上り口左側に、自然石に梵字 3 字を刻んだ枝源五郎の墓（逆修墓）がある。逆修とは生前に自分の墓を設け、あらかじめ死後の冥福を祈って仏事を済ませてしまうことである。

源五郎は元文元(1736)年、釜川沿いの旅籠屋「松屋」に生まれた。若い頃から義侠心の強い性格であったので、哀れな人を見れば黙って見過ごすことはできなかった。街道で旅路に難儀している旅人を見つけると、馬に乗せて無料で「松屋」に泊めたりした。

宝暦年間（1751～64）には町年寄に見込まれて、目明役となったが、しばしば困窮者を救い、極道者や無頼漢などに対しては厳しく戒めた。また明和 5(1768)年には、釈迦堂町（馬場通り 3 丁目）の坂道修復には敷石を寄付するなど、城下の町づくりにも大いに力を尽くした。

天明 5(1785)年、江戸へ出て侠客金看板藤九郎を抑えて、江戸侠客の第一人者となり、その名を天下に轟かせた。寛政 6(1794)年の田舎分限出世相撲番付には、世話人として枝源五郎の名がみえる。文化 3(1806)年、江戸で亡くなった。

墓地へ向かって石段を登り切った所で右折し、本堂を取り巻く崖縁に沿って進むと、左側に宇都宮藩中老縣六石の墓がある。

（埜静夫『うつのみや歴史探訪』）

7 寺の移建から考える中世の宇都宮

（1）奥大道—鎌倉への道（資料 7、8）

- ・鎌倉時代には、東国の御家人たちが鎌倉番役などで鎌倉に向かう道が発達した。今日、東日本の各地で鎌倉街道と呼ばれる古道がそれで、関東地方では鎌倉を中心に放射する形で鎌倉街道上道・中道・下道や京鎌倉往還などが形成された。

- ・下野を通過して陸奥と鎌倉を結ぶ道は中道であるが、そもそも鎌倉街道とは後世の呼び名であり、吾妻鏡などでは奥州に向かう道として「奥大道」の呼称が使われている
- ・下野国内を南北に縦貫する奥大道沿いには中世城館跡が散在する。代表は小山の祇園城跡であるが、下野市の下古館遺跡は宗教的施設をもった宿や市であったことが近年明らかにされた。

(2) 宇都宮を走る奥大道

①宇都宮氏家法「宇都宮家式条」(弘安6(1283)年)より

- ・58条は「駒牽到来送夫事」で、奥州から京都に送られる貢馬の夫役などを宿役として賦課したことを記してあるが、条文中に奥大道の宿々の構成は、「宿 上河原 中河原 小田橋」とある。文頭の「宿」を、永村眞氏は宿々の総称と見るが、江田氏は宿々の一つと解釈する(永村眞「都市宇都宮と庶民の生活」『図説栃木県の歴史』1993年、江田郁夫『中世東国の街道と武士団』2010年)(資料9、10)。

②鎌倉時代の宇都宮(以下、④まで江田氏論文に依拠)

- ・地名としての宇都宮は、鎌倉時代後半には史料からも確認できるようになる。「式条」によると、鎌倉時代後期の宇都宮は、宇都宮明神をはじめとする寺社や宇都宮一族の居館のほか、「宮中」(宇都宮一族や神官たちの屋敷一筆者)「町屋」「宿河原」から構成されていた。それぞれの内実については不明な点が多いものの、例えば「宿河原」は「宿・上河原・中河原・小田橋」からなり、宇都宮を通る幹線交通路奥大道に沿って、宿々が発達した状況がうかがえる。
- ・ちなみに「小田橋」宿とはかつての「古多橋駅」にあたり、「上河原・中河原」などの地名から見て、奥大道は宇都宮の東を流れる田川の西岸沿いを南北に通っていたことが判る。問題は、のこる「宿」の所在だが、南北朝・室町時代の史料からは、「むかい宿」や「宿之郷」の存在が確認できる。
- ・「宿之郷」とは「上河原・中河原」と田川を隔てた対岸一帯と考えられ、現在も宿郷の地名が残る。たぶん「むかい宿」も、「上河原・中河原」と田川を隔てた「むかい宿」の意味であり、「宿之郷」と同じ場所をさすのだろう。
- ・鎌倉時代の初頭には、おのおの別個に存在していた宇都宮明神と「古多橋駅」だが、鎌倉時代後期には、住民の増加にともなって「宿河原」が発達・分化し、「町屋」が拡大することにより、ひとつの都市域へと成長する。地名としての宇都宮の登場は、このような事態を象徴しているのだろう。

③南北朝・室町時代の宇都宮の入口

- ・注目されるのは贅木城の存在である。贅木は宇都宮の入口にあたり、それゆえ贅木城と称されるような防衛施設が置かれていたのだろう。
- ・ちなみに近世になると、贅木一帯は熱木町と呼ばれ、18世紀後半の明和年間(1764～72)の記録によると家数44軒の他、木戸が1ヵ所あり、熱木町入口の土居と柵は領主が修理し、番所1ヵ所があったという。近世になっても贅木一帯が城下町宇都宮への南の入口だったことがわかる。

④戦国時代の宇都宮の新しい町場

- ・この時期、町人の暮らす町場も相当の発展を続けていた。確実に戦国期まで遡れるのが「歌橋」の地名であるが、南隣する贅木(熱木)とともに、近世になっても奥

州街道沿いの町名として残った。橋という以上そこに道があったことは確実であり、戦国段階ですでに贅木・歌橋を通る街路が存在し、多くの住人が居住していたことを示唆する。たぶん、これを中世日光街道と仮称するが、この街道は贅木・歌橋、ついで松が峰と、宇都宮城の西側台地（宝木丘陵）の東端を通過して日光へと続いていったとみられる。

- ・たしかに、松が峰には室町時代に桂林寺（曹洞宗）や光琳寺（浄土宗）などの寺院が知られ、すでに一定程度開発が進んでいたことを窺わせる。戦国時代に小山高朝が「宮中・宿際・贅木をことごとく打ち散らし」という事態も、贅木から宇都宮城を経由せずに宮中にいたる中世日光街道の存在抜きには考えがたい。近世の奥州街道は、宇都宮城の城域と武家屋敷を拡大するために、この街路をいくぶん西にずらしたとみてよかろう。もし以上の推定が正しければ、本多正純による奥州街道の整備とは、実質的に近世初期まで併存していた奥大道と中世日光街道の二つのルートを一つにまとめあげたということになる。
- ・そのほか、近世宇都宮 32 町（のち 35 町）のうちには、歌橋・贅木以外にも今小路の地名が残るし、同じく寺町も「寺コウジ」の後身と見られる。ある意味で当然のことながら、近世城下町宇都宮は想像以上に中世以来の景観や都市プランを色濃く留め、それに規定された面が多かったことがわかる。

(3) 諸寺院の元あった場所(上記の文献から、『下』は下野国誌の略、以下同様)

①東勝寺（馬場通り3丁目）『下』（資料11）

- ・同所釈迦堂町にあり、宇都宮下野守貞綱、父景綱の為に建立する所と云、東勝寺は則ち景綱の法号なり、そのかみ（事のあったその時一筆者）田川の東にありて寺領 349 石、七堂伽藍そなわりしを、慶長 2(1597)年宇都宮家没収の時に廃寺となりしを、当所に移しわつかに普賢堂のみのこれり。
- ・開基は宇都宮 7 代城主景綱で、天台宗出羽国羽黒山寂光寺末として弘長 2(1262)年田川の東側に創建されたが、洪水などの災害を避けるため、永仁 6(1298)年 8 代貞綱が父の菩提のため寺域を拡張して荒尾崎（下ノ宮があったところ、現パルコ）に移転した。ここに釈迦堂・普賢堂・大御堂・文殊堂などの堂宇を建立、さらに正和 3(1314)年千手堂を建て、荒尾崎丘陵には鐘つき堂を建立して梵鐘を献納した。
- ・すなわち、東勝寺の本坊が下ノ宮の北方に置かれ（当時は旧上野百貨店も南側の道路も台地であって丘陵が二荒山から下ノ宮まで続いていた）、その丘陵を中心として西にも東にも堂塔が建立され、その一つである大御堂が旧「新うえの」の所に建てられ、宇都宮大明神と東勝寺は神仏一体の姿で構成されていた。
- ・だが、宇都宮氏の没落によって広大な境内は分断され、住職及び寺院管理者は不在となったが、大明神境内に建立されていた堂塔はそのまま残されていたようで、参道西側に建立されていた大御堂が江戸時代にもその姿をとどめていたようである。
- ・これより先、元和 6(1620)年、二荒山と下ノ宮に続いていた丘陵の中間に切り通しの道が開通し、東勝寺の本坊は全く姿を消したが、釈迦堂・文殊堂・普賢堂・千手堂などの堂宇が残って、往昔の面影をとどめながら幕末まで東勝寺遺跡がわずかながらも存在していたのである。
- ・梵鐘は廃寺になったあとも「およりの鐘」（およるとは寝るの尊敬語、即ち夕暮れ時の梵鐘）として町方から鐘撞人に扶持米が支給され、時の鐘として親しまれた。

明治時代にはいると下ノ宮に建てられた招魂社に置かれていたが、昭和 19(1944)年に宝蔵寺(小袋町)に移され今日に至っている。梵鐘は高さ 1.17 尺、口径 0.81 尺で龍頭の紋様は髭を蓄えた人面になっている。

(『宇都宮市史』第六卷近世通史編)

②宝蔵寺(大通り4丁目)『う』

- ・もと、芳賀郡下高根沢村長命寺台に在りしを、宇都宮左衛門尉朝綱の時、建久 5(1194)年「一説に三年とも云」高根沢郷から領内田川の辺(今の築瀬町)に遷し、寺領および永代護摩供料を寄進されたりと云。その後、明応年間(1500年頃)今の小袋町に移転し、光明山撰取院宝蔵寺と称すと云。

③応願寺(南大通り1丁目)『下』

- ・宿郷(南大通り1丁目)と云う所にあり、時宗にて遊行二祖真教上人の開祖。
- ・此宿郷と云所ハ、古の駅家なり。田川の向こうなれば元トは向宿とも呼ぶなり。
- ・又一書には、朝綱朝臣の草創にて、養和元(1181)年ともあり。元トは末寺 2ヶ寺ありし由。

④桂林寺(清住1丁目)『大』

- ・応永 3(1396)年、12代宇都宮満綱の内室祖心院殿宮山玉芳大禅定尼の開基にして、城内松ヶ峰に造営。

⑤清巖寺(大通り5丁目)『大』

- ・建保 3(1215)年、5代宇都宮頼綱蓮生法師の開基。宿郷町御室観音堂内に常念仏堂として草創。

⑥延命院(泉町4丁目)『大』

- ・宇都宮城主藤原宗円の開基にして、康平元(1058)年宗円が比叡山にあった延命地藏菩薩を本尊として中河原町に建立し、天台宗宝録寺と号す。

⑦妙正寺(大通り5丁目)『下』

- ・日蓮の弟子日郎の道場であったが、長宮左衛門の母が剃髪して名を妙正と号し、文永 2(1265)年日蓮を慕い熱木(現西原 3丁目など)の居館を寺院とし、日蓮を招いて開山した。寺名は妙正寺。

⑧成高寺(塙田4丁目)『大』

- ・文明 18(1486)年、17代宇都宮成綱が父芳賀成高菩提のため城内中河原に 7堂伽藍を建立したのが始まり。

⑨台陽寺(新町1丁目)『大』

- ・慶長 10(1605)年、奥平大膳大夫家昌が地藏堂郷(宇都宮城の南)に堂宇を創設。寺領 12石余。本多上野介正純の城郭拡張に際し、西原に移転。

⑩善願寺(南大通り1丁目)『大』

- ・宿ノ郷にあり、境内東西 34間・南北 21間 1640歩、

⑪一向寺(西原 2丁目)『大』

- ・建治 2(1276)年、7代宇都宮景綱の開基で、3代宇都宮朝綱の菩提寺として宇都宮城南の地藏堂廻輪寺地内に建立。

⑫興禅寺(今泉3丁目)『宇』

- ・臨濟宗、京都妙心寺末にて神護山と号せり。開山は真空妙応禅師にて、本願は宇都宮下野守貞綱なり(興禅寺は貞綱の法号)。寺中の正眼庵は、男公綱の法号にて元ト別所にありしを移し、ものといえり。

⑬宝蔵寺（大通り4丁目）『う』

- ・寺伝によると、天安元(857)年、慈覚大師円仁が芳賀郡下高根沢村（芳賀町）の地に長命寺を創建したものを、建久3(1192)年、明達が築瀬村田川東の畔ほとりに移し、寺領150石を賜ったという。

⑭安養寺（材木町5丁目）『宇』

- ・慶長10(1605)年、奥平大膳大夫家昌が地蔵堂郷（宇都宮城の南）に堂宇を創設。寺領12石余。
- ・本多上野介正純の城郭拡張に際し、西原に移転。

⑮光琳寺（西原1丁目）『宇』

- ・草創の年月、開基の事蹟は詳ならねど、元ト松ヶ峰に在りしを、後に伊賀町に移転し火災に罹り、慶長10(1605)年、今の地に再転せし由云伝ひたり。元ト境内に観音堂一字、松寿院・清浄院の2寮・道心寮2軒ありし由、今廢撤せり。六道口なる焰魔堂・地蔵堂、当寺の所管なり。

⑯常念寺（花房1丁目）『宇』

- ・下河原町にあり（御下、又押田共いへり）、境内縦100間、横130間、2240歩。亀井山清水院と号し、浄土宗、芳賀郡円通寺末なり。

⑰宝勝寺（小幡1丁目）『宇』

- ・当寺は宇都宮下野守景綱朝臣の時、城外の蓮池より出てたる三尊の弥陀を城内に安置し、応願寺二世與阿上人教道の弟子真歴の開基なるを、本多上野介正純、当城主たりし時、今の地（清住）に移し由云伝へたり。元ト寺中に天満宮の祠、道心寮3軒ありし由、今廢撤せり

⑱林松寺（南大通り4丁目）『宇』

- ・川向町（元ト宿郷とあり）にあり、境内東西67間・南北56間半。曹洞宗、清澄町桂林寺末、川向山と号せり。

最初はどこにあったかをまとめると

- ①田川の東側……東勝寺、宝蔵寺
- ②宿郷……応願寺、清巖寺、清巖寺、善願寺、林松寺
- ③中河原……延命院、成高寺
- ④下河原……常念寺
- ⑤熱木……妙正寺
- ⑥松が峰……桂林寺、光琳寺
- ⑦地蔵堂郷（英巖寺と常念寺結ぶ線の間あたりと推定）……台陽寺、一向寺、安養寺
- ⑧その他……興禅寺（別所）、宝勝寺（城内）